

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：32707

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02767

研究課題名(和文) フィリピン英語留学における教室内談話の分析：共通語としての英語使用の観点から

研究課題名(英文) Classroom Discourse Analysis in the Philippines from the Viewpoint of English as a Lingua Franca

研究代表者

羽井佐 昭彦 (Haisa, Akihiko)

相模女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：30285655

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、授業録画やインタビューを通して、フィリピン英語留学におけるフィリピン人講師と日本人学習者の教室内でのやり取りや共通語としての英語使用体験が言語態度に与える影響について分析した。またフィリピン人講師の英語使用の特徴、インタラクションにおける意思疎通のためのジェスチャーの使用、フィリピン英語留学産業に見られる国際英語論的な英語理解の潮流等についても考察した。本研究の成果は学会や論文等で発表し、日本の英語教育への提言を試みた。

研究成果の概要(英文)：This study investigates how experiences of learning English as a Lingua Franca influence Japanese learners' language attitudes and the interaction between Filipino teachers and Japanese learners of English in one-on-one classrooms in the Philippines, analyzing video-recorded interaction and group-interview data. It also examines Filipino teachers' language use and approaches in terms of intelligibility, the functions of gesture sequences when preempting problems in understanding, and also the discourse of commodification of English in the English school industry in the Philippines. The findings were presented through conferences and papers, which offered relevant implications towards English education in Japan.

研究分野：英語教育、第二言語習得論、社会言語学

キーワード：共通語としての英語 フィリピン英語留学 談話分析 言語態度 英語教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、英米留学に比べて学費や滞在費が安価なフィリピンへの英語留学が急増しており、その傾向は、英語非母語話者のフィリピン人講師から英語を学ぶという、共通語としての英語を媒介とする英語教育・学習環境を生み出した。しかし、そうした環境での様々な英語変種に対する日本人学習者の意識変容やフィリピン人講師の英語使用の特徴を対象とした研究は少なく、未だ十分に明らかにされてはいない。

(2) 先行研究において、日本人学習者が英語母語話者の英語を規範としつつ、フィリピン人講師の英語に対しても肯定的態度を示す傾向が見られ、英語の「わかりやすさ」もその要因と理解されていることがわかった。しかし、英語非母語話者である講師の英語の「わかりやすさ」を生み出す要素については明らかにされておらず、その解明によって、英語を英語で教えることが求められる日本人教師にとって何らかの示唆が得られるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、フィリピン英語留学における共通語としての英語 (English as a Lingua Franca: ELF) 使用体験が日本人学習者の英語変種に対する態度に与える影響を明らかにし、フィリピン人講師と日本人学習者の教室内インタラクションの分析を通して ELF 状況での英語使用の特徴を探究することである。日本におけるグローバル人材の育成が急務とされて久しいが、その成果は思うように上がっていない。本研究では、その一因が「母語話者による英語」を規範とする意識が英語使用を阻害する要因となっている可能性を視野に入れ、ELF 環境における英語接触が「共通語として使用する英語」への意識改革につながる可能性を模索する。さらに ELF 環境での英語使用の特徴を明らかにすることで日本の英語教育における新たな習得モデルの視点と枠組みの提供を試みる。

3. 研究の方法

本研究は、英語留学が学習者に与える影響及び ELF 環境における英語使用についての基礎調査、フィリピンに英語留学する日本人学習者 (留学前・留学中・留学後) およびフィリピン人講師へのインタビュー、留学中の授業の録音・録画、収集されたインタビュー及び授業音声の転記と分析、研究成果の発表、の 5 段階で構成される。平成 27 年度は、次年度の本調査に備え、先行研究を整理し本研究の理論的枠組みと調査内容・方法を策定したうえで、パイロット研究を試みた。平成 28 年度には、日本人留学生へのイ

ンタビュー、授業録画とそこでの言語使用の分析、さらに参与観察によるデータ収集と分析を行った。平成 29 年度は収集データの整理と論文執筆による研究成果の発表と情報リーフレット・最終報告書の作成を行い、対象となった学校等に配布することで成果を還元した。

4. 研究成果

(1) フィリピン英語留学が日本人学習者に与える影響について (言語態度)

ここでは、フィリピン英語留学において、英語非母語話者であるフィリピン人講師から英語を学び、様々な国からの留学生と共通語として英語でコミュニケーションを取るという ELF 環境での学習体験が日本人英語学習者の英語変種に対する意識にどのような影響を与えるのかを調査した。日本人留学生に対し、半構造化したインタビューを留学前、留学中、留学後と段階を追って実施した (留学生 6 人、延べ 7 時間)。インタビューは全て録音・文字化し、分析を行なった。その結果、次のことが明らかになった。

まず、本研究の参加者は留学前・留学中・留学後を通して様々な言語態度を見せていた。「ネイティブの発音」への憧れを持ちながらもフィリピン人講師の英語に肯定的態度を示したり、「きれいな発音」を指向する一方で「訛り」や「間違い」を許容したりするといった二者間の揺れが観察できた。また、フィリピンの語学学校というグローバルコミュニケーションの場では、第二言語としての英語を話すフィリピン人、外国語としての英語を話す日本人、韓国人、台湾人が混在し、そこでは英語母語話者の規範に相対的に近い英語を話すことよりも、お互いに通じてわかり合える英語を話すことがより重視されていた。そこには、英語母語話者により近い話し方をする人もいれば、話し手の母語の影響を強く受けた英語を話す人や一語一語の発話に時間をかける人もいる。そのような現実の中で留学生が学び取っていたのが、英語母語話者の規範に必ずしも縛られずお互いにわかり合える英語を模索し、歩み寄ろうとする態度であった。このコミュニケーションの中で模索される英語は、一種の中間言語として解釈することができる。

このような日本人学習者の言語態度を説明するために、参加者の「長期的願望」としては英語母語話者の英語を規範とし、現実的に到達したい目標としては、グローバルな場で使えるコミュニケーションのための「中間言語的な英語」を指向するというモデルを提案した。このモデルでは英語母語話者の英語を中間言語の先に位置するターゲットとして位置づけている。これは英語母語話者、特にアメリカ英語の教材や映画、インターネッ

ト上のコンテンツが豊富にあり、それが学習者にとって身近で明確な学習目標として認識されているという現実を反映したものである。ELF の立場からも世界の様々な英語変種を尊重することは極めて重要ではあるが、本調査では学習者の目指すモデルにアメリカ英語という一定の方向性があるからこそ共通語としての英語の機能が担保され、お互いにわかり合える度合いを高めていたことも否めなかったため、この点もモデルに組み込むこととなった。

しかし言語に優劣はなく、アメリカ英語も世界に数多くある様々な英語変種の1つに過ぎない。一つの変種が過剰に力を持つことを避けるために、その変種が歴史的経緯から、また便宜上たまたま目標の言語変種というポジションにあるという認識を共有することが必要である。筆者としては、いつか長い年月を経てグローバルコミュニケーションを円滑にする共通語としての英語のシステムが確立されることを強く願うものである。(羽井佐)

(2) フィリピン人講師の言語使用の特徴(言語面)

ここでは、マンツーマン授業において、フィリピン人講師が日本人学習者に英語を教える際に、どのような英語が使われているのかといった教室談話の特徴を言語面から分析する。その分析を通して、日本人学習者がフィリピン人講師の話す英語に対して持つ肯定的態度につながる要素を、先行研究でも明らかになった「わかりやすさ」の観点から探究した。具体的には、日本人留学生に対して実施した半構造化したインタビュー(留学生24人、延べ39時間)、マンツーマン授業の録音・録画(留学生2人の授業、延べ2時間)、フィリピン人講師に対する半構造化したインタビュー(講師2人、延べ2時間)を実施した。それらのデータをもとに、日本人留学生がフィリピン人講師の話す英語に対して持つ印象、授業での実際の英語使用、さらにフィリピン人講師の英語学習経験、英語観などについて調査した。

日本の中学・高校では、英語の授業は英語で行うことが基本とされており、学習指導要領では「生徒の理解の程度に応じた英語を用いること」が明記されている。英語で行う英語の授業を成立させるために「わかりやすさ」は極めて重要な要素であり、フィリピン人講師の使う英語がなぜわかりやすいのかという視点から、フィリピン人講師の英語を言語的側面および談話的側面から分析することは意味があると考えた。

言語的側面では、学習者のレベルに合わせた発話速度の調整、自己訓練による聞き取りやすい発音での授業、レベルに応じたシンプルでわかりやすい文法使用といった特徴が見られた。1分につき約130語程度の発話速度が「比較的ゆっくり」と認識され、フィリ

ピン人講師も意識して速度の調整をしていた。発音については、多くの講師が学生時代に体系的に学習しておらず、映画などを題材に英語母語話者の発音を覚え、繰り返し練習する努力をしたと語っていた。またわかりやすい文法使用については、フィリピン人講師の使う英語のほとんどが日本の中学校で学ぶレベルの英文であり、単文が多用され、文の長さも10語以内の短い発話が多いことがわかった。

一方、談話的側面では、フィリピン人講師が難しい表現を簡単な表現に換えて説明する「言い換え」の方法や、抽象的な内容を具体的な事例を示して描写する「例示」の方法を巧みに使用している様子が見られた。また、難しい質問に学習者がうまく答えられずに詰まっていると、講師が学習者の考えているような回答を推測し「代弁」する様子も多く見られた。これは会話の内容を確認しながら理解を促すという意味で「わかりやすさ」を補完するアプローチであり、講師による代弁が学習者にとって大きな学びになっていたことも重要な点であった。さらに一般的な質問を学習者個人に結びつけ「個人化」した質問に変えるアプローチを使って「わかりやすさ」を促進するやり取りも多く観察できた。

以上のフィリピン人講師の言語使用やアプローチの特徴は、日本人教師が英語で英語の授業を行う際に参考になるものと考えられる。(羽井佐)

(3) マンツーマン授業内のインタラクションの分析(非言語面)

ここでは、フィリピン人講師と日本人留学生間のインタラクションデータを emic に探ることを通し、相互行為場面での身振り(gesture)の機能を明らかにすることを目的とする。

これまでの共通語としての英語(ELF)におけるインタラクション研究では、音声・語彙面などの言語形式(language form)(e.g., Jenkins, 2000; Seidlhofer, 2001)や発話行為に焦点を当てた言語機能(language function)(e.g., Firth, 1996)を中心に調査が行われてきた一方、相互行為における対話能力(interactional competence)を探る研究はまだ数が少ない。先行研究によると、相互行為場面では、会話参加者達による様々な修復(repair)が起こっており、問題解決時にも修復を含むコミュニケーションストラテジーを用いた相互理解への意味交渉が行われていることが明らかになっている(e.g., Kaur, 2011; Mauranen, 2006)。しかし、それらの研究の多くが言語分析中心であるため、言語以外のリソースを分析対象に含めた実証的な研究はまだ数が少ない。そのため、フィリピン人講師と日本人留学生のインタラクションの特徴を質的に検証した。

まず、フィリピン人講師と日本人留学生によるマンツーマン授業の様子を録音・録画し

た(留学生 11 人の授業を対象に、延べ 17 時間)。そのうち特徴の顕著であった、2 組を定性的に分析した。会話データの分析には、会話分析において中心的なアプローチである連鎖分析 (sequential analysis) を用いるだけでなく、分析の対象が言語・非言語を包括するため、対話の文字起こしに加え、画像の分析も行い、対話の過程を詳細に示した。

分析の結果以下のことが明らかになった。まず、参加者達は言語的リソースだけに頼らず、非言語的リソースである、身振り・身体動作・身体接触・笑い・沈黙、などを意味交渉時において多く利用していた。さらに、マルチモーダル連鎖分析によると、彼らは、身振りを修復の一つの方略として利用しており、言語による意思疎通が難しい時、言語面の修正を直接または間接的に伝える時、そして関係性構築のために、身振りを使用していることが明らかになった。このことから、フィリピン人講師と日本人留学生はコミュニケーション上の問題を修復する際、言語的なリソースを常に用いて意味交渉を行っているのではなく、様々なリソースを用い協働的に会話を構築していることが明らかになった。本研究は、英語非母語話者間である ELF 相互行為場面では、言語的な要素だけにこだわることよりも、コミュニケーションをうまく達成するために不可欠である「非言語的ストラテジー」の重要性を示す一方、マルチモーダル・フレームワークを用いた研究の必要性を示している。(花元)

(4) フィリピン英語留学における「商品」としての英語教育(商品化)

フィリピン観光省によるとフィリピンで英語を学ぶために留学した日本人留学生の数は 2010 年の 4,000 人から 2015 年の 35,000 人へと増加した。日本人の英語学習者はフィリピン英語のような「ノンネイティブ」の英語よりも、いわゆる「ネイティブ」の英語(特にアメリカ英語)を好むとされているため(Hanamoto, 2010) この急増は矛盾しているようにみえ実に興味深い。これまでフィリピン英語留学の人気は価格競争力とマンツーマン教育などの点から説明されてきたが(e.g., Haisa & Watanabe, 2013) 主要な商品である「英語」がどのようなモノとして潜在的留学生(消費者)に届けられているのか(宣伝されているのか)という点についてはあまり議論されてこなかった。そこで本研究では、フィリピンの英語教育産業の中で英語がいかに商品化されているのかということ(パンフレットや Web ページなど)日本人留学生やフィリピン人講師などへのインタビューから分析した。

その結果、以下のことがわかった。1) ELF 論を背景に、ネイティブスピーカーの規範(英語)を絶対視せず、現実の英語を使ったコミュニケーションに必要な技能を高める

べきという主張がみられるようになってきている。このネイティブスピーカーの講師から学ぶことを相対化する考え方が、フィリピン人の講師によって教えられている英語の真正性を高めている。2) 宣伝資料などに頻繁に使われる「フィリピンでは英語が公用語」というフレーズは、フィリピンはアメリカやイギリスのような英語を国語とする国々とともに英語圏を形成しており、英語学習の場として正当であるという意味が込められている。ここには World Englishes (WE) 論の明確な影響が認められる。

このようなネイティブスピーカーやアメリカなどの伝統的留学先を相対化していく考え方の広まりからは、「英語」がもはやネイティブスピーカーやアメリカのような英語を国語とする国々の独占的商品ではなく、フィリピンや日本などの商品にもなりえることを示唆している。日本の英語教育界では、研究者や実践者が ELF や WE などの国際英語論的な考え方を導入しようと長年の努力を払ってきた(e.g., Honna & Takeshita, 1998) 上述のような形で商品化された英語が日本の英語学習者によって選ばれているという現状は、日本の学習者がネイティブスピーカーの規範(英語)を学ぶ周縁的存在から脱却し、英語によるコミュニケーションの技能を必要に応じて習得するという主体的な英語使用者へと自己認識を変化させてきているとみることができる。つまり、フィリピン英語留学産業によって商品化された英語の消費過程は、日本の英語学習者の国際英語論的な英語理解への変化を加速させている側面があることを指摘できるだろう。(渡辺)

(5) まとめと提言

本研究を通して、次のことが明らかになった。まず、言語態度については、フィリピン英語留学を選ぶ日本人学習者の言語態度は、一見ネイティブ指向の面を垣間見せたが、それは「願望的」であり、現実的とは理解されていない。実際には、それほど英語母語話者の英語にこだわってはならず、むしろグローバルコミュニケーションの場で英語を使うことができたら満足という側面が強いことだ。そして、フィリピン人講師の英語は「わかりやすさ」の観点から肯定的に捉えられていることもわかった。教室インタラクションの分析を通しては、言語面で、フィリピン人講師の話す英語の「わかりやすさ」は、速度や発音や文法の意識的なレベル調整、また言い換えや例示の使用、学習者の意図の推測と代弁、個人化のアプローチなどが使われていることが明らかになった。日本人教師と同様、フィリピン人講師にとっても英語は学習言語であるため、努力して生徒を満足させる英語力を身につけていたこともわかった。非言語面では、マンツーマン授業において、お互いのコミュニケーションの成立において、言語による意思疎通が難しい時や言語面の

修正を直接または間接的に伝える時、さらには関係性構築のために、身振りや身体動作といった非言語的のストラテジーも巧みに使用されていることがわかった。

一方、日本の英語教育界に目を向けると、2020年度より実施される小学校での英語正式教科化、英語の4技能を課す大学入試改革など、日本の英語教育界は大きな改革の真ただ中にある。また文部科学省は、中学・高校での授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、「英語の授業は英語で行う」ことを基本方針とした。しかし、英語教師はただやみくもに英語を使って授業をすれば良いというわけではない。「英語で行う英語の授業」は、しっかりした英語運用力を前提にしながらも生徒のレベルに応じた「英語」が使える教師と、それを理解できる生徒がいて初めて成り立つものであり、そのどちらが欠けても成立しないということを忘れてはならない。この点は学習指導要領も「生徒の理解の程度に応じた英語を用いる」という言葉で指摘しており、適切に調整された教師と生徒間での英語使用が「英語のわかりやすさ」につながっていることは明らかだろう。

このような意味で、本研究の中で、多くの日本人学習者が指摘したフィリピン人講師の話す英語の「わかりやすさ」は極めて重要だと考える。そして本研究が示す、発話速度、発音、文法使用、談話的特徴は一つの目安となるだろう。さらに、ジェスチャーなど非言語によるコミュニケーションも英語の「わかりやすさ」を構成する重要な要素である。

フィリピンのマンツーマン授業と多人数を相手にする日本の授業では異なる部分も多々あるが、「学習者がわかる授業を心掛ける」という方向性においてはフィリピンも日本も同様である。生徒が「わかった」と実感できる「わかりやすい」英語を使うことは極めて重要であり、そのためにはフィリピン人講師と同様、日本人教師も努力して教室での英語運用力と指導力を備えていく必要があるだろう。この研究から得られた示唆が日本の英語教育改善を図るうえでの一助となれば幸いである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

羽井佐昭彦、フィリピン英語留学における教室談話の分析：共通語としての英語使用の観点から、相模女子大学文化研究、査読無、第36号、2018、pp.25-39.

渡辺幸倫、国際英語論からみたフィリピン英語留学における商品としての英語教育の考察、相模女子大学文化研究、査読無、第36号、2018、pp.41-53.

HAISA, Akihiko、Discourse Analysis between Filipino Teachers and Japanese

Learners of English in the Philippines、The LCA Journal、査読無、31、2017、pp.55-67.

羽井佐昭彦、フィリピン人講師が日本人学習者に対して使う英語の分析、相模女子大学文化研究、査読無、第35号、2017、pp.37-51.

羽井佐昭彦、フィリピン英語留学が日本人学習者の言語態度に与える影響、相模女子大学紀要、査読無、Vol.80、2017、pp.11-24.

羽井佐昭彦、フィリピン英語留学が言語態度に与える影響 日本人学習者を対象としたインタビュー調査から、ウェブマガジン『留学交流』、査読無、2016年5月号 Vol.62.

〔学会発表〕(計6件)

HANAMOTO, Hiroki “ Toward enhancing clarity in lingua franca interaction: A sequential analysis in educational settings in the Philippines ” 1st International Conference Multilingual Education in Linguistically Diverse Contexts, University of Primorska, Slovenia (2017/09/30)

羽井佐昭彦「フィリピン英語留学のマンツーマン授業における英語使用の特徴」全国英語教育学会第43回島根研究大会(島根大学)(2017/08/19)

HAISA, Akihiko “ Why do Japanese Learners Consider Filipino Teachers’ English Intelligible? ” The 15th Asia TEFL - 64th TEFLIN International Conference, The Royal Ambarukmo Hotel, Indonesia (2017/07/14)

渡辺幸倫「フィリピン英語留学における商品としての"English as a Lingua Franca"」日本「アジア英語」学会第40回研究大会(中京大学)(2017/06/25)

HAISA, Akihiko “ Descriptive Analysis of One-on-One Instructions in the Philippines ” The 14th Asia TEFL and 11th FEELTA International Conference, Far Eastern Federal University, Vladivostok, Russia, (2016/07/01)

WATANABE, Yukinori “ English as a Lingua Franca ” for sale ” The 14th Asia TEFL and 11th FEELTA International Conference, Far Eastern Federal University, Vladivostok, Russia (2016/07/01)

〔図書〕(計1件)

HANAMOTO, Hiroki、Cambridge Scholar Publishing、Gesture sequences and turn-taking strategies in communication settings in the multilingual Philippines. *The many faces of multilingualism: Findings and insights from across the globe*、査読有、2018(印刷中)

6. 研究組織

(1)研究代表者

羽井佐 昭彦 (HAISA, Akihiko)
相模女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：30285655

(2)研究分担者

渡辺 幸倫 (WATANABE, Yukinori)
相模女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：60449113

花元 宏城 (HANAMOTO, Hiroki)
東京電機大学・理工学部・講師
研究者番号：60625797